

# 生殖機能温存について

～がんの治療と生殖機能への影響について～

## ●生殖機能温存(妊よう性温存)は女性にも男性にも関わることです

妊娠するためには卵子と精子が必要となり、卵巣、子宮、精巣などが重要な役割を果たしています。がんの治療では、それらの妊娠に関わる臓器にがんができた場合だけでなく、一見妊娠と関係のないような臓器にがんができた場合でも、生殖機能に影響してしまい、妊娠するための力が弱まったり、失われたりすることがあります。

## ●将来子どもをもつことについて、がんの治療前に考えてみましょう

がんの治療の進歩によって、多くの若い患者さんもがんを克服できるようになってきています。そして近年では、将来自分の子どもをもつ可能性を残すために、卵子や精子、受精卵を凍結保存する「生殖機能温存」という選択肢も加わってきました。まずは、がんの治療を受けることが大前提ですので、必ずしも希望通りにならない場合もありますが、将来子どもをもつことを望むのか、治療前に考えてみることも大切です。

## ●生殖機能温存のことについて担当医に聞いてみましょう

将来子どもをもつことについて考えるためには、担当医に気持ちを伝え、「がんの治療によって生殖機能にどのような影響があるのか」や「がんの治療後の見通し」を確認する必要があります。その上で、生殖機能温存を検討する場合は、生殖医療を専門とする医師(産婦人科あるいは泌尿器科)の診察を受ける必要があります。

もし、説明される言葉が難しい場合は、理解できるまで質問をしましょう。何ができるのか、どのようなことになるのかを理解した上で、何を選択するのか、よく考えることが大切です。また、自分ひとりの問題ではないため、状況を理解してもらうためにも、患者さんとご家族やパートナーの方でお互いに話し合うことが大切です。



高知大学医学部附属病院における相談窓口)



がん相談支援センター

外来診療棟2階脳神経外科横にあります。

☎088-880-2179 (平日8:30～17:15)

## 女性患者とその関係者の方へ

妊よう性とは、性欲や排卵に関わる機能、子宮や卵巣などの生殖器の機能を含めた、妊娠・出産に必要な機能のことをいいます。がんの治療が妊よう性に影響することによって不妊になる場合には、一時的な場合と永久的な場合があります。また、病状やがんの種類、どのような治療を行うかなどにより異なるため、担当医に十分な説明を受ける必要があります。

治療ごとの妊よう性への影響については、以下の1)手術による影響、2)放射線治療による影響、3)薬物療法による影響の項目で説明しています。

### 1)手術による影響

手術の範囲が生殖機能に関わる器官に及ぶことによって、妊よう性に影響があります。

### 2)放射線治療による影響

腹部・骨盤部に照射が行われた場合は卵子への影響が強く、照射される放射線の量が増えるほど卵巣へのダメージが大きくなります。また、子宮も影響を受けやすく、妊娠に必要な環境が整えられなくなることがあります。

なお、放射線治療後も妊よう性が保たれ妊娠した場合には、放射線による胎児への影響はありませんので、病状や他の治療の必要性を考慮の上、特に問題がなければ治療後の避妊は必要ありません。

### 3)薬物療法による影響

薬剤の中には、卵子や卵巣の機能に大きく影響するものと、ほとんど影響しないものがあります。どのような薬剤を使うのか確認し、わからないことは担当医や薬剤師に聞いてみましょう。

なお、薬剤は胎児に影響を及ぼすため、治療中は避妊してください。また、治療終了後も薬剤によって一定期間避妊することが勧められています。

女性がつま卵子は、加齢とともに数が減少し、質が低下します。同じ年齢であっても、卵巣の機能は個人差が大きく、薬剤の影響がどれくらいあるのかは異なります。卵巣の状態については、産婦人科の検査で確認することができます。

---

## 男性患者とその関係者の方へ

妊よう性とは、性欲や精子の形成、勃起、射精などの機能を含めた、生殖に必要な機能のことをいいます。がんの治療が妊よう性に影響することによって男性不妊になる場合には、一時的な場合と永久的な場合があります。また、病状やがんの種類、どのような治療を行うかなどにより異なるため、担当医に十分な説明を受ける必要があります。

治療ごとの妊よう性への影響については、以下の1)手術による影響、2)放射線治療による影響、3)薬物療法による影響の項目で説明しています。

### 1)手術による影響

手術の範囲が生殖機能に関わる器官に及ぶことによって、妊よう性に影響があります。

### 2)放射線治療による影響

腹部・骨盤部に照射が行われた場合は、分裂が盛んな精子のもととなる細胞が影響を受けます。照射される放射線の量が増えるほど精巣へのダメージは大きくなり、精子の形成ができなくなることがあります。

なお、放射線治療後の妊娠には、放射線による胎児への影響はありませんので、病状や他の治療の必要性を考慮の上、特に問題がなければ治療後の避妊は必要ありません。

### 3)薬物療法による影響

薬剤の中には、精子や精巣の機能に大きく影響するものと、ほとんど影響しないものがあります。どのような薬剤を使うのか確認し、わからないことは担当医や薬剤師に聞いてみましょう。

なお、薬剤は胎児に影響を及ぼすため、治療中は避妊してください。また、治療終了後も薬剤によって一定期間避妊することが勧められています。